

第17回「みえ歩こう会」はJR さわやかウォーキング「新春伊勢神宮めぐり・神域を訪ねて」に相乗りして実施した、参加者は2名（泰さん・笹やん）の伊勢参宮となった。以下その手記をまとめてみた。

十返舎一九「東海道中膝栗毛」より



1806年（文化3年）に書かれた『東海道中膝栗毛 五編 上下 追加』に東海道桑名の渡しから（桑名 - 追分）（追分 - 山田）（伊勢めぐり）が書かれている、その一部を覗いてみる。

弥次さん喜多さんは、伊勢神宮へのお参りよりも古市（ふるいち）に心を奪われていたようで、道中で知り合った京の男から、

「ナントこよひ、これから古市へいこかいな」

と誘われると、弥次さんは、

「まだ宮めぐりもせぬさきに、もつてへねへよふだが、まゝのかは、やらかしやせう」

と、“やらかす気”満々です。

古市の遊郭では、京の男との間にトラブルが発生します。

「もう帰る！」とへソを曲げた弥次さんに、案内役として来ていた宿の主人が、
「モシこうしよかいな。これから、柏屋の松の間をおめにかけてふわいな。ただし麻吉にお供しよかいな」

と、ご機嫌をとるのです。

この麻吉は、今も営業を続けている料理旅館。今宵（こよい）はこちらでお世話になりたい……。

ところだが今日の「みえ歩こう会」は日帰りの旅、そもいかず玄関を入ただけで今の主人（上田聖子さん）と立ち話、写真を撮って引き返した。

旅の仕上げは遊里で命の洗濯「古市界限」

伊勢市の古市町かいわいは江戸時代、江戸の吉原、京の島原などと並ぶ五大遊郭の一つに数えられた遊里。『膝栗毛』に登場する千束屋、歌舞伎「伊勢音頭恋寝刃（こいのねたば）」でも有名な油屋などが軒を連ね、かつてはこの辺りに70軒もの妓楼（ぎろう）等があり1000人ほどの遊女、留女（とのおんな）がいたそうですが、昔日の面影を残すのは、今や麻吉のみとなっていました。

創業200年を超えるという旅館「麻吉」。名は代々の主、麻屋吉兵衛に由来する。現在、切り盛りするのは「恐らく20代目」という上田聖子（しょうこ）さん（53）、その主人聖子さんをお願いして玄関前で写真を撮ってもらった。





坂道を利用した建物は、外から見ると木造二階建てだが、下へ下へと六層にもわたって続く、時代劇のセットに出てくるようなたたずまいで江戸時代にタイムスリップしたような気持ちでした。

その後、牛谷坂を下り、猿田彦神社を経て伊勢神宮・皇大神宮（内宮）へお参り。

弥次さん喜多さんは古市で遊んだ翌日、内宮からお参りしたようですが、この時はさすがに神妙になって、

「すべて宮めぐりのうちは、自然と感涙肝にめいじて、ありがたさに、まじめとなりて、しやれもなく、むだもいはねば……」 という具合なのです。

江戸期にはこの「お伊勢参り」が盛んに行われ、旅の仕上げは吉原や島原と並ぶ遊里、古市での命の洗濯だと言われています。

お伊勢参りは参宮線で

伊勢街道は、東海道でも通る四日市・日永の追分を基点に伊勢湾沿いに伊勢神宮を目指す街道で、江戸時代は“お伊勢参り”でにぎわう街道でした。

鉄道の発達とともにお伊勢参りも大きく変わった。

「参宮線」とあるように、伊勢神宮への参詣路線として建設された路線である。1893年（明治26年）から1911年（明治44年）にかけて開業した、もともと亀山駅 - 鳥羽駅間が参宮線とされ、伊勢神宮参詣のお召列車も通る重要路線として幹線並の扱いを受けていた。

1970年に近畿日本鉄道（近鉄）の鳥羽線が開業すると乗客は大きく減少し、

一時は存廃問題にまで発展した参宮線であるが、その収支は現在でも厳しく、全国の JR 線中でワースト 2 で営業係数は 422.1 (100 円の収入を得るために 422.1 円の費用がかかる) とされている。ちなみに、ワースト 1 はこの 3 月 26 日に開通する同じ三重県内の名松線で 534.4 と推定されている。

今回の第 17 回みえ歩こう会「新春伊勢神宮めぐり・神域を訪ねて」では旅客運賃が近鉄に比べて高いことは承知の上で JR 参宮線「快速みえ 51 号」を利用して伊勢参りをすることとした。

秦さんが四日市から、私は津駅から乗車、6 両編成で 8 時 40 分に津駅に到着した「快速みえ 51 号」は始発駅の名古屋から満車、通勤ラッシュ並みで立錫の余地もない程の超満員状態で伊勢市駅まで立ちっぱなし、9 時 28 分に予定通り到着した。

お伊勢参り

お伊勢参り……、元々、伊勢参宮の歴史は古く、鎌倉時代中期以降、神宮信仰の担い手であった御師の布教が全国的に広まるのと歩を合わせるように、道の整備や、織田信長の政策などにより各地の関所が廃され、参宮者の数も増加。更に、江戸時代になると、幕府主体の宿駅制度の制定や交通事情の改善に加え、経済的・時間的余裕を持つまでになった庶民層も大いに旅を楽しむことができるようになっていた。

当時、庶民の移動、特に農民の移動には厳しい制限があったが、伊勢神宮参詣に関してはほとんどが許される風潮であった。特に商家の間では、伊勢神宮に祭られている天照大神は商売繁盛の守り神でもあったから、子供や奉公人が伊勢神宮参詣の旅をしたいと言い出した場合には、親や主人はこれを止めてはならないとされていた。

旅そのものがいわば庶民の娯楽であった安定期の江戸時代には、伊勢参宮を目的とした講(伊勢講)ができ、旅費を積み立て、くじで代表を選んで交代で参詣する、およそ 60 周年の周期で集団で伊勢参りをする“お陰まいり”が起こり、数百万人規模で全国各地から参宮者が伊勢を訪れた、これを「おかげ参り」と呼び、慶安 3 年(1650)、宝永 2 年(1705)、明和 8 年(1771)、文政 13 年(1830)に起こった「おかげ参り」はつとに有名である。これを「おかげ年」とも言う。

お蔭参りの最大の特徴として、奉公人などが主人に無断で、または子供が親に無断で参詣したことにある。無断で長期間旅に出ても伊勢神宮にお参りしたこと証拠品となる「お札など」のお土産を持って帰れば許されたという。

これが、お蔭参りが抜け参りとも呼ばれるゆえんであり、大金を持たなくて

も信心の旅ということで沿道の施しを受けることができた時期でもあった。

江戸からは片道15日間、大坂からでも5日間、名古屋からでも3日間、東北地方からも、九州からも参宮者は歩いて参拝した。陸奥国釜石（岩手県）からは100日かかったと言われる。

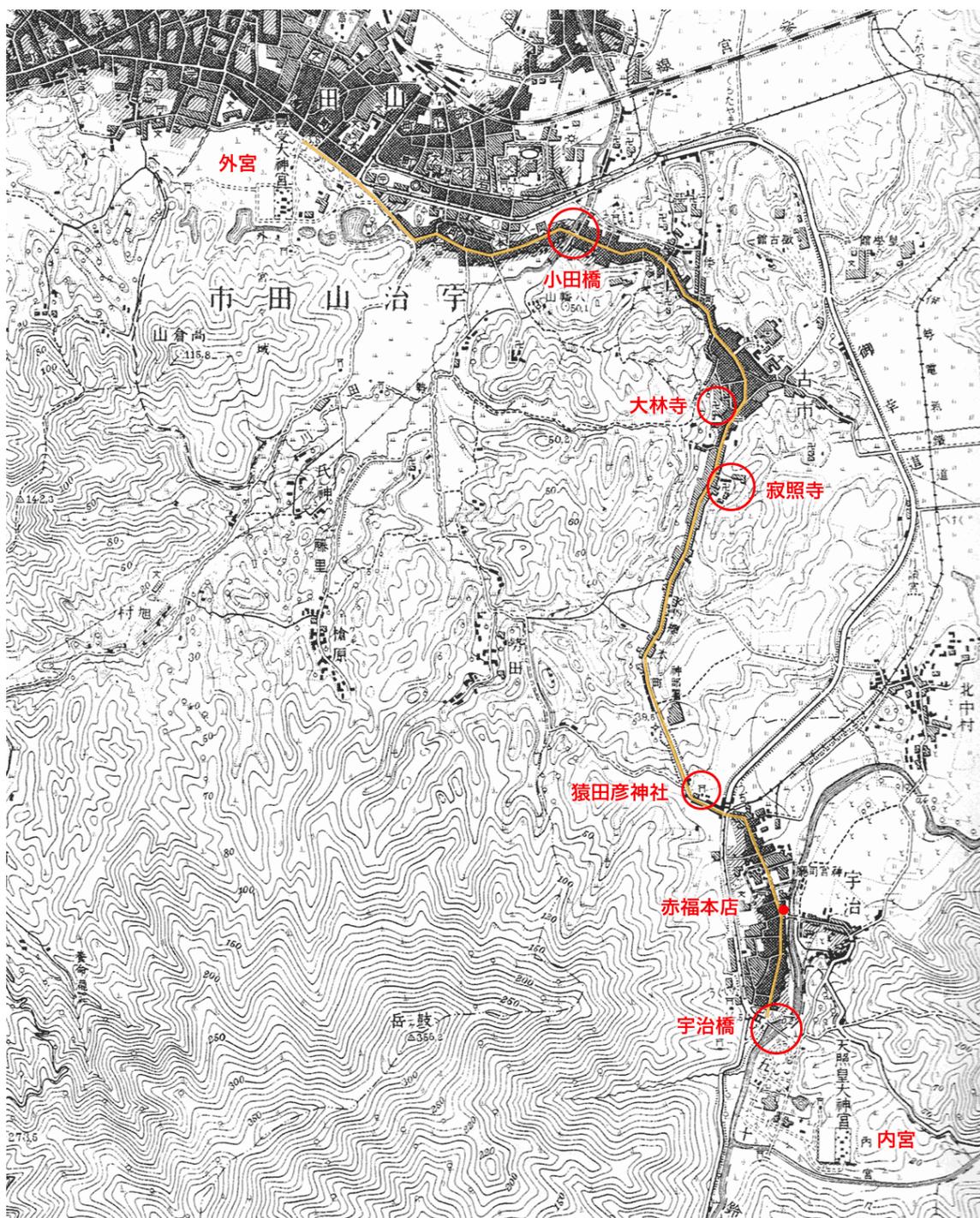
時代が変わった今も、昔もお伊勢参り（お陰参り）の人気を見せつけられた感じだ。

外宮から古市街道を経て内宮へ

秦さん・笹やんの二人旅は、伊勢市駅から外宮（豊受大神宮）に参詣。

鳥居をくぐり、きれいにまき水をされた玉砂利を踏みしめてやさしい木漏れ日のさす参道を歩くと清々しい気持ちが満ちあふれてくる。

外宮参詣から内宮へ、弥次さん喜多さんも歩いた間ノ山(あいのやま)の道（標高差30数メートルほど）上り、（昔は、外宮から内宮へ参る尾根伝いの険しい山道、この道を通らんければ内宮、鳥羽、志摩方面へも抜けられなかったそうです）平坦な長峰を経て、当時の伊勢の特徴的な街並みである妻入り家屋や名所史跡などを見ながら古市参宮街道資料館へ、館内では当時の面影をしのび温かいお茶のもてなしで一息ついた。



おかげ参りなどで賑わいを見せたその当時、「参宮客の精進落としなどと称し」、お楽しみの場として、歓楽街として……「伊勢参り、大神宮にも、ちょっと寄り」という川柳があるほどに活気に満ち溢れていたという。



資料館には、遊郭など約 70 軒、遊女 1000 人、浄瑠璃小屋 3、4 軒。中でも備前屋・杉本屋・油屋の遊郭は特に有名で、備前屋は古市屈指の大楼阁で、桜の間の伊勢音頭の総踊りが有名。油屋で起こった殺傷事件は「伊勢音頭恋寝刃」として今でも歌舞伎で演じられてる。この他、「お杉とお玉」の小屋跡など残るように歌舞伎、浄瑠璃も盛んでした。特に伊勢歌舞伎は全国的にも知られており、役者の登竜門として古市で名を挙げようとする者も多かったようです。

今でこそ、その栄華を示すものは、何も残っていませんが、町並みの中や旅館麻吉、参宮街道の道標、古市参宮街道資料館などで、その面影を垣間見ることが出来ました。

内宮からおかげ横丁へ

冬の青空の下、内宮（皇大神宮）に真面目に参拝、身が引き締まるような神宮でのお参りを済ませたあと、おはらい町を散策。

立ち飲み処「白鷹」でお神酒を頂き、「すし久」でてこねずしの昼食をとった。



(
写真は「すし久」2階からおかげ横丁を撮影)

御幸道路を経て伊勢市駅へ

古市でのとろけるような夜を想像しながら、江戸時代の人々をして「一生に一度は」と思わせたのだろうかあと、おもいながら伊勢市駅へ

伊勢市駅ではJR さわやかウォーキングの終了を証し、「伊勢市駅 駅名バッヂ」と「伊勢極みえびせんべい」をお土産にもらい帰途に着いた。

帰路は、近鉄電車に乗車、津、四日市へとそれぞれ帰宅の途に……、11キロの「第17回みえ歩こう会」の手記でした。(笹山記)